

◆連載はじめます 000_131006

荀彧を主人公にした文章（小説にしたいが、経験が少ないからエッセイに流れるかも）を、毎日更新するという「実験」をしてみたい。

この（二〇一三年）九月から、青空文庫で読めるようになった吉川『三国志』は、日刊という制約があった。書かれる方法と内容は、不可分。ダメ元で試してみたい。タダで開示できる、ネットの良さを活かした遊びだと思えます。

ホームページのトップの右側に、順次更新です。

いつか書きたい『三国志』 <http://www.3guozhi.com/>

◆荀家の第五子 001_131008

荀彧は、あざなを文若という。潁川の潁陰県の人。

荀彧が生まれたのは、後漢の桓帝の延熹六年（一六三）である。このとき、父の荀緄は、

洛陽で官職に就いていた。荀緄が第五子の誕生を知ったのも、洛陽においてだった。

荀緄は、在任の期間のみ、洛陽の城内に邸宅を借りている。

「二息のご誕生、おめでとうございます」

郷里から吉報を運んできた荀氏の従者は、荀緄の表情がくらいので、不審がった。

「体調でも、お悪いのですか」

「いや、そうではないが」

荀緄は、肩をおとした。

「わが子の将来にも、多くは望むまい」

荀緄は、漢家の官僚であるが、漢家に対して、あまり心酔していない。彼に元気がない

原因は、彼の父・荀淑の処世にあった。

かつて荀淑は、ときの執政者に向けて、

「官僚の任免が公正でない」

と主張し、尊敬を集めた。

荀淑のことを、

「神君」

とすら呼び、称える者もおおい。荀緄は「神君」の子として、尊敬を受けてきたのだが、

この環境があまり好きではなかった。

「公正であることは、重要なことだ。それよりも、まず、この天下が豊かであってほしい」
荀緄はため息をついた。

「いいえ。公正であるべきですね」

突然、人が入室してきたので、荀緄は驚いた。弟の荀爽だった。この荀爽こそが、「神君」の血をもつとも濃厚に継承している者だと、兄弟のうちで、もつとも評判が高い。

荀爽はこのとき三十六歳である。荀緄の正確な年齢はわからないが、二人のあいだには、少なくとも他に三人の兄弟がいる。荀緄は、四十歳を越えているであろう。

「兄上。志を語るのは、おおいに結構です。しかし、ここは洛陽。だれが聞いているか、分かりません。ご注意をなさらないと、密告を受けます」

「そうだな、ありがとう」

荀緄は、かるく頭を下げつつ、口許をまげた。周囲への過剰な目配りが必要とされる洛陽という場所が、やはり自分に合わないと思った。しかし、官職を棄てる権利もないし、いつ地方に転出できるかも分からない。

荀緄は、目の前にいる荀爽にすら聞えないように、小さな声で言った。

「穀物がおおいに実り、飢える者がいない。公正の議論よりも、私はそちらのほうが優先だ

と思う。国家の正統のために、人が死ぬのはおかしい。正統のために人が死ぬようなことは、あってはならない」

また荀緄は、ため息をついた。

「黍稷は、彧彧たり」

どこで聞いたかも分からない一節が、荀緄の口から出た。

『詩経』の信南山ですね」

すばやく荀爽が、出典を言い当てた。穀物が盛んに茂っている様子を、うたった部分である。荀緄の願望が、記憶の断片にあった詩と結びついたのであろう。

「彧彧たり。そうか、彧にしよう」

荀緄は、第五子の名を決めた。「彧」の字を、ゆつくりと木簡に彫りつけ、それを従者に渡した。従者は、ひざをつけて木簡を押しいただき、洛陽から郷里へと向かった。

荀緄と荀爽が二人になったところに、門番から連絡が入った。

「太尉の楊秉さまが、お二人をお呼びです」

太尉とは、漢家の最高位の官職である。

「太尉さまが、何の用だろうか」

荀緄は首をかしげた。荀爽は無言だが、鼻をふくらませている。

さて、太尉の楊秉から、荀彧の父たちへの用事とは何でしょうか。つづきます。

◆楊秉の申し出 002_131009

太尉の楊秉にあうため、荀緄と荀爽の兄弟は、太尉府にいった。楊秉は、かんたんな料理を用意した。食事がすむと、人ばらいをした。

「二人を呼んだのは、見せたい文書があるからだ」

七二歳になる楊秉は、荀緄たちを手招きして、彼の手元にある文書をのぞきこませた。

「これは」

読み終えた荀緄の顔が青ざめた。

「皇帝を諫めようと思っっている」

楊秉は声を殺した。

「内外の官職には、適任でない人材が就いている。旧典によると、宦官の子弟は、たかい官職に就けてはならない。だが陛下は、宦官の子弟や賓客を用い、天下が苦しんでいる。だから、彼らを罷免すべきである」

楊秉が概要をくり返した。文書には、たくさん宦官の名を列挙して、その不正を暴い

ている。

「まさに同じことを考えておりました」

荀爽が清々しく叫んだ。

「しかし、なぜこれを私たちに」

荀緄は腕を組んだ。

皇帝を諫めることは、危険がともなう。内容は、機密であるべきだ。上程する前の諫書を、他者に見せるといふのは、おかしい。

「きみたちが、あの神君・荀淑の子息だから」

「と、仰いますと」

荀緄が首をかしげた。

「すまない。正確に言おう。私は老いた。見所のある次世代の人士たちに、志を継承してもらいたい。だから、賛同者をつのっている。相手によっては、説得が必要な場合がある。だが、神君の息子たちには、説得は不要だろう。むしろ私が教わるべき立場かも知れない」

「謙遜を」

荀緄が身体を後方にずらした。

楊秉の父・楊震は、なんども皇帝を諫め、名臣として誉れが高い。三公を歴任し、尊敬

をあつめた。弘農の楊氏は、二代つづけて三公を出した家柄である。

「私たちは同志だ。漢家を善導するためには、まずは宦官の關係者を、頭職から退けること。宜しいか」

「はい」荀爽が、ほほえんだ。

「はい」荀緄は頭を深々とさげた。表情を見られないためである。

荀緄は、こうした政争の仕方にも、心から同意できない。たしかに、苛酷な徴税をする者は、官職から除くべきである。だがそれは、宦官の子弟に限ったことではない。

「賛同します」

意に反して、荀緄は言葉をつないだ。

いま楊秉に議論を挑むべきではない。諫言によって名声を得て、太尉にまで昇り詰めた老人に、荀緄が言えることなどない。

内心の葛藤を楊秉に読みとられぬよう、荀緄は頭を下げたまま、さらに後方に身体をずらし、立って席にもどった。

翌月、楊秉の諫言は聞き入れられ、青州刺史などの地方長官が解任された。

「まさか実現するとは」

荀爽は喜びつつも、不思議がった。おおくの諫言は、皇帝の機嫌をそこねて却下される。荀爽もそれは理解しているため、このたびの解任を、にわかには信じられない。

「楊氏の誉れが、また高まる」

「だがこれで、宦官の集団が逆襲にでる」

荀緄は、つぎの政争に怯えた。

「逆襲なんて、させてはならない」

そんなことを話しながら、夜道を二人で歩いていると、目の前に、中背の男が立ちふさがった。

「宦官だな」

荀爽がつぶやいた。行灯によって浮かび上がった服装から、それと分かるのだ。けがれたものの名を呼ぶかのように、荀爽は粗雑に発音した。

「やり過ぎそう」

荀緄は、足を速めた。

「もし」

宦官は身体を横にずらして、荀緄の進路を妨害した。

「急ぎますので」

荀氏の兄弟は、相手にしない。

「もし、と呼んでいるではないか」

宦官が、近くにいた荀爽の腕をつかんだ。

「なんだ」

荀爽は、腕をふりほどいた。宦官は「これを」と、なにかを差し出した。荀爽は、火を近づけてそれを照らし、にわかには手の甲で打ち払った。乾いた音が、夜道にひびいた。

「木の札か」荀緄が聞いた。

「唐衡の名刺だ」

荀爽が吐き捨てた。唐衡とは、楊秉が名指しで弾劾した宦官の一人である。

「邪悪な宦官の名刺など、受け取れるか」

この言葉が終わるか終わらないかのうちに、風を切る音がした。つぎに荀爽が、うつ、と呻いた。行灯を落とした。

「どうした」

「矢のようだ。射られたらしい」

荀爽は、名刺をはらったほうの腕を、押さえている。

荀緄は、周囲を見渡した。夜闇がひろがるばかりで、射手の姿は見えない。眼前に立つ

宦官のもつ火が異様に明るく感じられ、周囲の景色を消してしまう。

「弟の無礼を、兄がつぐなってくれますか。それとも、兄弟とも、ここで死んでもらいましょうか」

宦官は、荀緄に言った。

「どうやら宦官は、荀氏の兄弟だと理解した上で、交渉を持ちかけているらしい。」

「つぐないとは」荀緄の顔に汗が流れた。

「結婚してほしい」

宦官から求婚されてしまった、荀彧の父・荀緄。暗闇には射手が潜むため、むげには断れない。荀緄は、いかに切り抜けるのか。つづきます。

◆唐衡の求婚 003_131010

「結婚してほしい」

荀緄は夜道で、宦官の唐衡から求婚された。

「結婚ですか」

荀緄の足が震えた。周囲の暗闇には、射手を狙いをつけているだろう。回答によっては、

矢が飛んでくる。

「宦官と結婚とは……」

荀緄の奥歯が鳴った。

いいえ、と唐衡が手を振って打ち消した。

「私には養女がある。荀緄どのには、数人の子息があると聞いた。そのうち一人に、私の養女を娶ってもらいたいのです」

唐衡はそう言うと、懐に手を入れた。

——短剣でも出てくるか。

荀緄は身構えた。

出てきたのは、木の札である。唐衡が荀爽に差し出したのと同じ、名刺だった。

——受けとれば、婚姻の受諾か。

荀緄は、弟の荀爽を見た。荀爽は地に膝をつけて、矢の痛みを耐えている。彼は兄を見上げて、小さく首を横にふった。

「あり得ない」

と、口のかたちをつくった。

高潔な荀爽なら、宦官との婚姻を、生命に賭けても認めないだろう。「うっ」と荀爽が

声を漏らして、身体を横に傾けた。

「荀爽さん、邪魔しないでください。私は、兄の荀緄さんと話をしています」

唐衡の指図で、第二の矢が、荀爽に打ち込まれたらしい。荀緄は動けない。弟の傷の具合を見てやることもできない。

——災難の原因は、父だろうな。

荀緄は、神君と呼ばれた父・荀淑を呪った。宦官の唐衡は、政治的な立場を強化するために、味方を集めているはずだ。先日、太尉の楊秉と呼ばれたときも、目的は同じだった。

穎川の荀氏を味方にしたい者は多いようだ。

唐衡が、名刺を押し出した。

「さあ。ご賢察を」

「婚姻の件、承った」荀緄は、手を伸ばした。

「義兄さんには——」

唐衡は、荀緄を義兄と呼びつつ、すばやく名刺を引っこめた。「四人の男子がいると聞いています」

荀緄は、名刺をつかみそこねた。

「調べたのか」

荀緄が唐衡をにらんだ。
構うことなく、唐衡はつづける。

「誰をわが婿にくださるのか。そこまで約束をしてもらわねば、意味がない」
荀緄は、唐衡の周到さに呆れた。

四人の男子の顔と名が、頭をめぐった。全員が愛おしい。夜道で脅迫され、あろうことか権勢が傾いた宦官の婿にするなど、考えたくもない。いや、権勢が傾いたからこそ、この宦官は婚姻を申し出ているのであるが。

「どの子ですか」

唐衡が顔を近づけた。

——唐衡を人質にして、逃げられないか。

荀緄は一瞬だけこれを考えた。だが、射手がどの角度に控えているか分からない。唐衡を抱えこんでも、意味がない。

「婿にさしあげるのは……」

荀緄は、わざと言いよどんで、時間を稼いだ。悩んだすえ、逃げるのは難しい、と諦めた。二矢を受けてしまった荀爽が、どれほど走れるのかも分からない。

「婿にいただけるのは……」

唐衡がさらに近づいた。

「い、彧という子だ」

「荀彧ですか」唐衡は表情をくもらせた。

「そうだ。荀彧が、唐衡どのの養女と結婚する。約束をしよう」

「そのような子が、荀氏にいたか」

「いる。先月、生まれたばかりだから、ご存知ないのだろう。私の第五子だ」

洛陽に勤務する荀緄は、まだ荀彧の顔を見ていない。すでに面会した他の四人の子を、宦官の婿にしたくなかった。だから荀彧を供犠とした。つらい決断だが、ほかに選択はなかった。また、新生児は死にやすい。もしも荀彧が死んでしまえば、宦官との婚約は解消される。

「荀彧。この名を忘れませんよ」

唐衡は、いちど引き戻した名刺を、ふたたび荀緄に押しつけた。気のぬけた荀緄は、反射的に受けとった。唐衡は、いまさら恭しく頭を下げると、行灯の火を消して、暗闇に消えた。

「私は、ひどい決断をしてしまった」

荀緄が青ざめた。

「それよりも——」

我に返った荀緄は、矢の刺さった荀爽を助け起こした。歩けるか、と聞くと、弟は無言で頷いた。

邸宅にもどって、矢傷を手当てした。二本とも、右腕に刺さっていたが、あまり深くなかった。矢を抜くときだけ、荀爽は顔をしかめた。終始、無言の担当となった。

傷口を布でしばった荀爽が、はじめて口を開き、

「荀彧を殺しましょう」

と言った。

荀彧が死ねば、約束は解消となる。この発想は荀緄にもあった。だが荀爽は、積極的にその事態をつくり出そうとしている。

「神君の子である私たちが、宦官の姻戚となる。あつてはならぬことです」

荀爽は決めつけた。

「仕方あるまい」

宦官と姻戚となり、その宦官が没落すれば、すべての荀氏が連座する。新生児の一人より、一族の保全のほうを優先する。当然といえば当然の判断だった。

「二人で帰郷しましょう」

荀彧を殺すための帰郷である。

彼らの故郷である潁川は、洛陽のある河南と隣接している。ながい旅ではない。馬に乗れば、一日で到着できる。

「わかった」

翌朝、荀氏の兄弟は、故郷へと出発した。荀彧をねらう「刺客」は、他でもない父の荀緄。荀彧は殺されてしまうのでしょうか。つづきます。

◆荀爽の殺意 004_131011

荀緄は、弟の荀爽とともに帰郷した。

さっそく妻に出迎えられた。妻は荀緄に、着物にくるんだ赤子を見せた。

「彧です」

荀緄は、赤子をのぞいた。生まれたばかりで、丸く膨らんでいるが、落ち着きのある顔立ちである。貴相というのとは少し違うが、人の心を安らげる風貌に思われた。

——この子を殺すのか。

胸中で、荀緄はうなつた。

——宦官の婿になるくらいなら、この子にとって、死んだほうが幸せなのだ。と、自らに言い聞かせたが、その理路にまったく納得していないことに気がついた。

——声望などなくても良いから、無事に生き延びてほしい。

荀緄がこの子を「彧」と名づけたのは、豊かに育ててほしいからだ。政争や声望の駆け引きに、生命を費やすべきでない。そういう荀緄の願いが込められた名である。

もし荀彧を殺せば、荀緄のその願いが、永久に潰えるように思われた。彼は、妻にむけて腕をのばし、子を受けとった。

「ああ。彧や、彧や」

荀緄は涙を流した。

「子は、何人目でも可愛いものです」

妻も涙を流した。

彼女は、夫の涙の意味を知るはずもない。ただ、夫の真摯な姿に、心を打たれたようだ。

ここまで見届けた荀爽は、

「疲れましたので、私はこれで」

と退いた。

「兄上、また今夜にでも」

去りぎわの荀爽は、含みのある言い方をした。今夜、荀彧を殺そうとほのめかしたので。

「そうだな」

荀緄は、幾重もの衣服の上からでも、荀彧の体温を感じていた。

その夜、荀緄が荀爽の居室をたずねた。

「連れてきましたか」

荀爽は、荀緄が手ぶらなのを怪しんだ。計画では、荀緄がここに荀彧を連れてきて、殺すはずだった。鼻と口を圧迫すれば、外傷をのこさず簡単に殺せるだろう。

「荀彧はどこに」

彼自身は、とくに意識していないのだろうが、荀爽は殺気をおびた。

「すまない」

荀緄は、こうべを垂れた。

「やはり惜しくなりましたか」

「すまない」

荀緄は、くちびるを噛んだ。

「いいです。兄上のことだから、予想していました。もう手は回してあります」

「えっ」

顔をあげた荀緄は、弟の目が、暗く光るのを見た。

この時期、漢家の体制に対抗する人々のあいだで、決死の賓客をあつめることが流行っていた。荀爽もまた、賓客をおおく養っている。荀爽は、これを使役したに違いなかった。

「待ってくれ」

「待てません。これも荀氏のためです」

荀緄がひざをついた。

「すまない」

三度目のこの言葉は、違約した荀爽にでなく、幼い荀彧に向けての詫びだった。

そのとき、室外から足音が聞こえた。

「もう終わったか」

荀爽は、床にうづくまる兄を避けて、そとを覗いた。

「あ……」

その体勢のまま、荀爽は硬直した。

「長兄——が」

「久しぶりだな、爽」

荀儉が現れた。

荀緄と荀爽が属する荀氏の兄弟は、八人が成人しており、

「八龍」

の異名で、潁川の郡内でたたえられた。いま現れた荀儉が最年長で、荀緄がその次である。

荀爽は、兄弟の六番目である。

入室した荀儉は、ちいさく咳をした。

「長兄、体調はいかがですか」

荀爽は、表情を取り繕った。

「それより、矢傷の具合はどうだ」

荀儉が、歳の離れた弟をねぎらった。

「卑劣な宦官から矢を受けたのは、痛恨の極みです」

荀爽は、傷を受けた腕をもみながら、少し的外れな回答をした。

彼は経書につうじた秀才である。荀儉の言葉を、意図的に誤解したのだろう。また、なぜ長兄が来たのか、事情を嗅ぎとったはずだ。

——荀彧を生かす気だな。

なにながあっても、意見を通す。荀爽は、そう決意を固めた。

「私だって、次兄の子を、すなわち従子を殺したくはありません。しかし——」

先手を取って、荀爽は長兄に訴え始めた。

「しかし、どうした」

長兄が発言をうながす。

「宦官との癒着は、一族の恥辱です。だから彧を殺すべきです。次兄も、合意したことで
す」

荀爽は、荀緄をにらんだ。荀緄は、赤く腫れた目をふせた。

彼は半日のあいだ、幼子の荀彧を抱いたまま泣き続けた。妻は異変に気づいた。だが荀緄は、妻に理由を話せなかった。

追い詰められた妻は、長兄の荀儉に相談したらしい。長兄は、荀爽の賓客をしめあげ、計画を察知したのだろう。そうでなければ、この展開はあり得ない。

「爽よ。権道という方法がある」

長兄が諭すようにいった。

「正しいか否かの議論はべつにしても、いま皇帝は宦官を重用する。私の見立てでは、宦官の権勢は、今よりも強くなるだろう」

これを言いながら、また荀儉は咳きこんだ。

「あつてはならぬことです」

荀爽が叫んだ。

「正誤の議論ではない」

ただちに荀儉が制した。

気迫に押されて、荀爽が黙った。

荀儉は、切々と荀爽に教えた。

「彧が、唐衡の婿になると約束したのなら、それを守ろう。時運に沿ったことである。ひとつの信義でもある。われらの世代にて荀氏は、人材に恵まれた。諸勢力と結んでおくのは、生存戦略として悪くない」

「両端を持つのですか」

「言葉をつつしめ、爽。何があっても、荀氏は漢臣である。漢臣という枠組のなかで、幅をもたせるのだ」

荀緄は、だまって議論を見守った。

荀彧を殺すな、と主張する長兄には、感謝の念をいなく。だが自分を起点とする子孫は、宦官との共存を担当せよ、と言われているようだ。そこまでは望まない。

長兄は、胸をそらした。

「荀氏は、純然たる漢家の忠臣として——」

ここまで言って、荀儉は血を吐いた。あわてて自分の手で口を押さえたが、間に合わずに、血が飛び散った。

「兄上——」

荀緄が、荀儉を抱きかかえた。

家長である荀儉が、いま故郷にいるのは、病気により官職を退いたからである。体調に問題があることは、荀緄も承知していた。だが、ここまで病気が進行しているとは思わなかった。

「漢家の忠臣、忠臣、忠……」

荀儉がまた喀血した。

「もう喋らないでください」

室外から、十五歳くらいの少年が飛びこんだ。少年の片手には、赤子が抱かれている。

荀緄は、とっさに視線を走らせた。紛れもなく、赤子は荀彧だった。だが荀緄は、この少年の顔を知らない。

「我が子は、だれに抱かれているのか」

荀緄は動揺した。

さて、せっかく荀爽の説得に現れた長兄は、病が篤く、もう言葉が出ない。そこに、荀彧を抱いて乱入した、なぞの少年。どうなってしまうのでしょうか。つづきます。

◆荀悦の論戦 005_131012

長兄の荀儉は、六弟の荀爽に「荀彧を殺すな」と説得を試みながらも、喀血して崩れ落ちた。

乱入した少年が、荀儉に駆けよった。

「もう喋らないでください」

少年は、苦しそうに口を動かす荀儉の肩に手をまわした。

「漢家の忠臣……」

荀儉は、うなされるように反復した。意識が混濁しても、なおも忠臣であることに、こだわっている。言葉の意味は文脈から切り離され、ただ荀儉の執念の強さだけを示している。

「もう充分です、父上」

少年は、荀儉を父と呼んだ。

——父だと。

荀緄が知るかぎり、荀儉の子でもっとも優れているのは、荀悦である。十二歳で『春秋』を修得し、借りた本をすべて暗誦したという。

「おまえは、悦か」

荀緄は、おそろおそろ少年に声をかけた。幼いころに会ったきりで、顔が分からない。悦、と呼んだものの、確信がなかった。

「はい、叔父上」

少年は微笑みでこたえた。彼は、小脇に抱えていた赤子の荀彧を、荀緄に渡した。

「父より保護を命じられ、私がこの子を預かってしました」

「ありがとうございます」

荀彧にとって、荀悦は従兄にあたる。このように、同世代の血縁者が助けあっていたら、どんなにか良いだろう、と荀緄は思った。

荀緄は、つかのまの夢想をした。

数十年後、漢家の朝廷で、荀悦と荀彧がそろって皇帝に仕える。二人は協調して、善政を推進する。あまい見通しかも知れないが、そういう時代の到来が理想だ、と思った。

荀儉は、弟の荀緄と荀爽、子の荀悦に看とられて死んだ。これを見届けると、荀爽は、「ところで、荀彧のことだが」

と、話題を戻した。

荀儉が忠臣であることに過剰に執着したように、荀爽は、名声をたもつことに過剰に執着している。

荀緄は、荀彧を抱き寄せた。身体を斜めに傾け、荀爽の視線を遮断した。亡き長兄が、荀彧を生かすと判断したのだ。荀爽に押し切られてはならない。

「荀彧を渡してほしい」

荀爽が近づいた。

「お待ちください」

荀悦が立ち上がった。

まだ少年の面影が残っているが、身長がおおきく、かすかに威厳すらある。八龍の筆頭の血を、濃厚に継承しているようだ。

「叔父は——」

荀悦は、荀爽と正対した。

「秦末の田氏をご存知ですね」
荀爽はうなずき、黙考した。

田氏は、秦末の混乱期、兄弟であいついで王となったが、従父が従子を殺し、ついには敗退した。史書に通じた荀悦は、故事をほのめかして、荀爽の説得を試みている。

「田氏の場合は――」

故事の解釈をめぐって、荀爽が反論した。

どちらも博識であり、また雄弁なので、勝負がつきそうにない。

突然、荀悦が泣き出した。

――威厳があっても、やはり子供か。

荀緄は、味方が敗れたと思いい、落胆した。荀儉と荀悦の父子でも、制止できないのであれば、いよいよ荀彧を殺さねばならない。絶望した。

「話をついたな」

荀爽がいった。

いいえ、と荀悦が腕をあげた。

「亡父は私に、従弟の彧を守れと命じました」

荀悦が涙をぬぐった。

「私は子として、亡父の遺命を守る義務があります。同時に、父の喪を弔う義務もあります。叔父が荀彧を殺すというなら、私は反論を続けねばなりません。そのあいだ、亡父の葬儀は遅れます。人として、あるまじきことです。だから泣いているのです」

いよいよ荀悦が、声をあげて泣いた。

「そういうことか」

荀爽がため息をついた。

「いまは長兄の喪のほうが先か」

荀彧の殺害が中止された。

荀爽は、儒教の礼制について、ひとかどの学者である。その彼が、いくら政治的な主張のためとはいえ、礼制をないがしろにするはずがなかった。たくみに論点をすりかえた荀悦の機転のおかげで、荀彧は助かった。

安堵した荀緄は、あやうく荀彧を床に落としそうになった。

二年後の延熹八年（一六五）、太尉の楊秉が、宦官の縁者の悪政をあばいた。

「唐衡が死んだそうです。唐氏の養子は、爵位を嗣げませんでした」

このとき荀緄は、洛陽で尚書として務めている。部下から、唐氏の失脚の報せを聞いて、

胸をなでおろした。

唐氏から使者がきて、

「ぜひ婚約の継続を」

と懇願されたが、

「まだ彧は幼いので……」

と、曖昧に答えることができた。

もしも、生後まもない荀彧を殺していたら、はげしく後悔しただろう。権勢は移り変わりが激しい。荀緄は、目まぐるしい転変をにくむ者だが、今回はそれに救われた。

つぎの延熹九年（一六六）、荀爽は名声を買われて、郎中となった。

しかし同年、宦官に敵対した官僚が、禁錮される事件があった。「神君」荀淑とつながりのある名士たちが、処罰された。荀爽は政治のあり方を鋭く批判してから、官職を棄てた。

さらに三年後の建寧二年（一六九）、禁錮の範囲が拡大され、処罰が重くなった。荀淑と交流した名士たちは、地下にもぐらざるを得ない。

「兄はいるか」

荀爽が、荀緄が洛陽で借りている邸宅をおとすれた。荀爽は無官なので、時間に融通がきく。予告なく現れては、堅実な官僚である兄を驚かすのだった。

「荀彧は、七つになっただろう」

荀爽は従子のことを、なぜか姓をつけて呼ぶ。彼は荀彧を、親しむべき従子でなく、潜在的な政敵として扱っているようだった。

「それがどうした」

荀緄は警戒した。

「七つなら、もう自分で歩ける。荀彧を私に預けないか」

「何を言いつすのだ」

故郷で、荀彧は順調に育っている。なぜ荀爽に近づけて、わざわざ危険に晒さねばならないか。

「また殺すと言うのではなからうな」

「殺したくて、うずうずしている」

「何だと」

「いや、殺すべきだと思っている」

荀爽は、当世の不当な禁錮は、宦官が元凶であると力説した。

「荀彧と宦官とのつながりは、数年前よりも、いっそうひどく荀氏の名声を損なう。だから荀彧を殺すべきなんだ」

「唐氏との婚約は、棚上げしてある」

「しかし、つながりを完全に絶ててはいない」

「それは、そうだが：」

荀爽は、立ち上がった。

「もう話しても仕方がない」

荒々しい足音をたてて、荀爽は退室した。

「ぜったいに彧に手を出すなよ」

荀爽の背中に、荀緄は念を押した。

数日後、潁川の荀氏の家には、荀爽が現れた。

「兄上のご指示で、私が荀彧を預かることになった。見聞をひろげるため、天下をめぐる旅に同行させる」

従者たちは、とまどった。だが、荀彧の父・荀緄の指示だと言われては、逆らうことが

できない。

荀彧は荀爽に手を引かれて、家を出た。

叔父の荀爽は、荀彧をどのように扱うのでしょうか。つづきます。

◆ 許劭の評価 006_131013

叔父の荀爽に腕をひかれ、七歳の荀彧は家を出た。

荀彧は、ぽろぽろと涙をおとした。

「どうした。家を出るのが怖いか。淋しいか」

荀爽は、さらに強く腕をにぎった。荀彧の弱々しい腕が、紫色にかわった。

「いいえ」荀彧が、首を左右にふった。

「うそを言うな」

また荀彧が、首をふった。

「じゃあ、なぜ泣いている」

荀爽は、荀彧の腕をはなし、見下ろした。

何度もしゃくりあげたあと、やっと荀彧は「父は……」と意味のある言葉を発した。

「父は、どんな小さなことでも、誤解や行き違いのないように、書面で指示を出します。そういう人です。しかし叔父は、父がつくった文書を持っていなかった。叔父がぼくを連れ出したのは、父の依頼ではない。叔父は、従者たちを欺いたのです」

「だとしたら、なんだ」

荀爽は、荀彧の洞察力に、ぎくりとした。

「親族を欺き、従者たちを欺く。そんなやり方が、天下の信義を得られるとは思いません。だから泣くのです」

うそだな、と荀爽は思った。

荀彧は誘拐されたので、単純に恐懼して泣いているのだ。だが恐懼してもなお、それなりの理屈を組み立てた従者に、荀爽は見所を感じた。

「殺すのは待ってやる」

荀爽は、荀彧の手のひらをとった。

「人物評論を受けてみよう。もし及第しなければ、今度こそ殺す」

——殺さないでほしい。

と、荀彧は言えない。旅程にあつて、すべての権限は叔父がにぎっている。

乳児のうちに、「宦官の婿」という汚名を背負ってしまった荀彧。儒者として優れた叔父は、とことん厳しい。だが叔父が執拗に関与するのは、じつは期待の裏返しかも知れない。

荀爽は東南にゆき、潁川に隣接する汝南をめざした。

郡境を通るころ、後ろから早馬が駆けてきた。

「高官が帰郷する。道を空ける」

とのことだった。

荀爽たちは徒歩であり、幼い荀彧が歩ける速さでしか進めない。高官の一行に追い抜かれることは必至である。

荀爽は、街道のわきに逸れ、小山に登って、樹木のかげに荀彧を座らせた。

「高官とは誰だろうか。見てやろう」

地平の向こうが煌めいた。土煙をあげて、五十人ほどの編隊が駆けてきた。郡境の直前で、先頭にいる者が、

「生まれ」

と指示をした。

「意外に若いな」

荀爽は声からそう判断した。

「着替えろ」

編隊の指揮者は、おかしな命令を出した。五十人は、金属の擦れる音をたてて、衣服を解いた。

「軍装の解除か」

荀爽は、手をかざして日光をさえぎり、編隊のほうを見た。金属の音は、鎧を片づける音かと思われた。日光が反射して、荀爽の目を射た。まぶしい、と荀爽が顔をゆがめた。

「軍装じゃない。装飾を外している」

珍妙な光景に、やっと説明がついた。

「噂には聞いていた。あれが袁紹の帰郷か」

荀爽は、楽しそうに笑った。

「袁紹とは、誰ですか」

荀彧が、叔父に聞いた。

「そのうち、思い知るだろう。彼こそ、次代の英雄だ。荀彧が仕えるのは、袁紹かも知れない」

「ぼくが袁紹に仕えることに――」

「そうだ」

もしも私がお前を殺さなければな、と荀爽は付け足した。服装の早変わりという「見世物」を見ることができた叔父は、機嫌が良さそうに笑った。

荀彧が、袁紹という名を聞いたのは、これが初めてだった。

荀爽は、許劭を訪問した。

彼の住居は重厚で大きい。

許劭の原籍は、荀氏と同じ潁川である。だから荀氏は、許氏と交流がある。いま許劭は汝南に移住し、ここでも尊敬を受けていた。

荀爽が名刺を出すと、すぐに面会が許された。

許劭は、肌つやのよい若者だった。

「従子の器量を見定めて頂きたくて」

荀爽は、息子のような年齢の許劭に、深々と頭をさげた。荀彧の背に手を回して促し、許劭のそばに座らせた。

「荀彧です」

自ら名乗った。

許劭は、いくらか荀彧と会話した。荀彧は幼いなりに、背筋を伸ばして、利発に応答した。

「この子は、漢家の至忠の臣であろう」

「至忠の臣」

荀爽が反芻した。

「そう、至忠。もしも漢家が傾危したとき、先頭にたつて、皇帝の威信を回復する。荀彧とは、そういう人物だと思う」

「漢家は傾危するのですか」

荀爽は、荀彧に対する評価よりも、その前提のほうに関心をむけた。次代の話よりも、彼自身が生きる当代に注意がむく。

「私は予言者ではない。ひとつの比喻として、荀彧を理解するときの材料として、いまの話を確認してもらいたい」

「はい」

荀爽は引き下がった。

だが許劭が、意味のない比喻を持ち出すとは思えなかった。荀彧の代、すなわち自分よ

り一つ下の世代で、漢家は傾危する。

「治世から乱世へ……荀爽は独言した。

どのような仕方で傾危するのか、きっと許劭は教えないだろう。だが、宦官の体制を快く思わない荀爽にとって、うれしい比喻だった。

「なるほど」

許劭は、荀爽の理解が追いつくのを待ち、

「だが、この子は——」

と、さらに何かを言いかけたとき、

「許劭はいるか、許劭は」

と叫び、床を破裂させんばかりの足音で現れた男がいる。高くてよく通る声で、「許劭はどこだ」と連発した。

荀彧は、吸い込まれるように振り返った。

許劭と会話しながら、後ろを向くのは、作法に外れる。しかし荀彧は、声の主を見ずには、いらなかった。

「許劭はどこだ」

幼い荀彧から見れば、大きな男に見えた。

だが荀爽は、

——なんだ、子供か。

と呆れた。尊大なわりに、背丈が小さい。

「出て行ってもらおう。いまは荀氏と会っている」

許劭が無礼をとがめた。

「だめだ。許劭は今すぐ、俺を評価しなければならぬ」

背丈の小さな男は、会話を噛みあわせる気がなさそうだ。

「出て行け」

荀爽も怒鳴った。

小さな男は、まるで怖じ気づかない。彼はいったい誰なのでしょう。つづきます。

◆ 治世の能臣 007_131014

小さな男は、許劭に人物評論を要求した。

「論じる筋合いがない」

許劭は冷たくいった。

「これでもか」

小さな男は、木札を出した。それを読んだ許劭の目元が、ぴくりと動いた。

「橋玄どのからの紹介状があるなら、先に見せれば良いものを」

ふん、と小さな男が鼻をならした。

橋玄というのは、三公を経験した高官である。小さな男は、橋玄と面識があるらしい。

「紹介状の有無で評論を変えるのか。許子将ともあろう者が、ずいぶん不潔だな」

「不潔だと」

許劭は、気分を害したようだった。

「ところで、きみは誰だ」

「えっ」

こんどは、小さな男が面食らった。

「そこに書いてないか」

彼は、橋玄の木札を指さした。

「書いてある。操くんを頼むと。ところで、操とは誰か。仲間うちで、聞いたことのない

諱だ。姓を名乗らないか」

「ふん。姓によって、評論を変えるのか」

小さな男・操は、威勢のよさを保っているが、じつは動揺を隠しきれない。自分の諱を、平然と「聞いたことがない」と言われ、自尊心が傷ついた。

紹介者の橋玄は、知己の許劭に対して悪戯を仕込んだらしい。あえて、不備のある紹介状を書いたのだ。

「まあ、さしずめ——」

許劭は、操との会話に飽きたようで、さっそく評論を始めた。

「治世の能臣だ。姓なしの操どのは」

「ははは、それは良い」

黙っていた荀爽が、笑い声とともに会話に割り込んだ。

許劭が荀彧を評論するとき、乱世の到来を前提とした。治世に関する評論は、なんの意味も持たない。許劭なりの嫌味だと、荀爽は酌みとった。

「わはは」

許劭も笑った。荀爽に興味を理解してもらえたので、満悦のようだ。

「馬鹿にするな」

操は、床を踏み抜いた。

彼には、二人が何を笑っているのか分からない。嘲笑されるより、仲間はずれになる方

が屈辱だった。人脈を構築したくて許劭を訪問したのに、かえって疎外された。

「それでも、能臣と言えるのか」

操は突進し、荀彧をさらった。

「もう一度だ。俺を、この曹操を評論しろ」

操——曹操は壁を背にして立ち、荀彧の首を締めあげた。子供の命はない、とわめいた。

荀爽は、曹操が俊敏なので、荀彧をかばえなかった。だが、曹操の名乗りを聞いて、かえって落ち着いて腰をおろした。

「殺すなら殺せ」

「殺せだと：」

荀爽の変化に、曹操が困った。

「曹操といったな。宦官の曹騰の養孫だろう」

「いかにも」

曹操は、自分の認識のされ方が嬉しいような、嬉しくないような、複雑な表情である。

荀爽は、曹操の手元を指さした。

「その荀彧は、宦官の婿になると約束がある。宦官の孫が、宦官の婿を殺す。これもまた、ひとつの物語の結末だろう」

荀爽は曹操から視線をはずし、関心がないことを露骨に示した。

——厄介な問題が片づいた。

とばかりに、清々しそうですらある。さて、と言って、許劭とべつのお話を始めようとした。

「役立たずめ」

曹操は、荀彧を投げつけた。よたよたと、幼子が進んだ。荀爽は、はじき返すわけにもゆかず、いちおう抱きとった。

みな視線が荀彧に集中するなか、曹操は神速で、主人の席にいた許劭の背後にまわりこみ、首を腕でかためた。

「これでも、能臣と言えるのか」

曹操が、腕に力をこめた。

許劭は黙ったままである。生命が惜しいからではない。もし殺されるとしても、意地を賭けて黙っていたように考えた。

「曹操どの、辞めなさい」

声をあげたのは、荀彧だった。

荀彧は、足を開いて立ち、こぶしを振って主張した。大人の背丈の半分しかないが、荀彧は説得に入った。

曹操は冷酷な目で、荀彧を見下ろした。

「子供は黙ってる。殺されたいか」

曹操の腕が、さらに許劭を絞めた。

「そこまでだ」

部屋の周囲に、武装した兵が集まった。許劭が養っている賓客である。異変を聞きつけて、集まってきた。

「曹操どの、辞めなさい」

荀彧がくり返したが、相手にされない。

曹操と賓客は睨みあったままだ。賓客たちが、じりじりと近づいた。許劭は、じつと動かない。

さて曹操と許劭は、どうなるのでしょうか。つづきます。

◆ 乱世の姦雄 008_131015

許劭の賓客と曹操とのあいだで、乱闘が始まった。曹操はせまい室内で剣舞し、あつさり五十人ほどを倒してしまった。

部屋の隅で腰をぬかした許劭は、

「乱世の姦雄め——」

と、曹操を怨んだ。

「いい評論だ」

曹操は、ずるそうに笑うと、剣をおさめた。荀彧の頭に手を乗せ、

「俺を諫めたな」

といい、額を突き飛ばした。身体の均衡をくずされ、荀彧は仰向けに倒れた。叔父は、もう受けとめてくれなかった。

「乱世になったら、この姦雄に仕えないか」

「乱世なんか来ない。来てたまるか」

上体を起こし、荀彧がすごんだ。

「またな」

曹操は荀彧の目を見据えてから、退室した。

許劭の敷地に、警護する者は残っていない。曹操は、ゆったりと歩いていった。

「ひどい目に遭った」

許劭は、首をなでた。

「こんなときに、悪いのですが」

荀爽がいった。

「曹操がくる前に、なにかを言いかけてましたね。聞いておきたい」

荀爽は、もはや荀彧を幼児だとあなどれない。生命を顧みず、曹操を制止したのだ。従子に関する情報を集めておきたいと考えた。

「この子は、水によって難を受ける。気をつけなさいと。これを言おうとした」

「水難。わかりました」

二人の荀氏もまた、許劭の家を去った。

——至忠と水難。

荀彧は、自分に課せられた言葉を記憶に刻んだ。もちろん、単純には信じられない。

だが、もし自分が水難に遭えば、許劭の眼力が確かめられる。至忠の臣もまた、実現するかも知れない。

——水難は避けたいが、至忠にはなりたない。

思考は、とめどなく循環するばかりだ。

しばらく歩いてから、荀爽は、

「腹が減ったな」

といって、店に入った。

「とんでもない賊がいたものだ」

料理をつつきながら、荀爽は曹操を批難した。そう思わないか、と荀彧に意見をもとめた。

「…はい」

荀彧は、卓上の一点を見つめている。利発な従子にしては、反応がにぶいと思った。

「まさか曹操に魅入られたか」

叔父は、軽蔑するように言った。

「あれはせいぜい、盗賊か叛徒のたぐいだ」

「…はい」

荀彧は、食べ物を嘔むのもやめた。

「どうしたんだ」

叔父がいぶかった。

荀彧は口のなかのものを飲みこんで、訥々と持論をのべた。

「たとえば漢家の高祖（高帝の劉邦）も、はじめは盗賊のようなものでした。世祖（光武

帝の劉秀）も、叛徒のようなものでした」

荀彧が言い終わる前に、ほおを叩かれた。まずは何が起きたのか分からず、つぎに口の中に血の味が広がった。

「何を言ったのか、分かっているか」

「…はい」

曹操を創業の英雄に例えるということは、漢家が終焉し、曹操が王朝を建てるという予感の表明である。論理に飛躍があるが、突き詰めればそうなる。

叔父は、宦官の体制をにくむが、漢臣としての心構えがしみこんでいる。荀彧を殴ったのは、身体化された反応だった。

「申し訳ありませんでした」

荀彧は素直に謝った。

これは、いかにも子供らしい失言だった。

だが荀爽は、

——曹操に英雄を見出したな。

と察した。

まったく心にないことは、失言にすら出ない。

荀彧は曹操に「乱世はこない」と言った。だが、よほどの狂者でない限り「乱世はくる」と言うはずがない。荀彧は、本人すら気づかぬところで、確実に乱世を予見している。「やはり殺さねばならんか」

まだ荀爽は無官だが、いずれ官職を得て、漢家を改革するつもりだ。そのために、荀氏をまとめるべきである。荀彧のような者がいては、ほころびがでる。

——こいつが至忠だと。まさかな。

荀爽は、意図的にあきれ顔をつくった。

「しばらく会わないうちに、許劭は目が曇ったか」

彼は残りの飯を口に投げ入れた。

「親友にも会わせよう。彼の評価によっては、やはり荀彧を殺す。殺しておくべきだ」

「…」

荀彧は、叔父をにらんだ。

曹操の勇敢な剣舞が、荀彧の心を強くしていた。もし叔父に斬りかかれても、どこからともなく曹操が現れて、助けてくれるような気がした。

「なんだ、その目は。宦官の婿という先天的な素性は、かくも人格をむしばむか」

荀爽はむきになって叱り、食事代を支払うと、道を急いだ。

さて荀彧はだれに会い、いかに評価されるのでしょうか。つづきます。

◆王佐の才 009_131017

荀彧は叔父の荀爽に連れられ、汝南の郡治を訪れた。

二人は、市場の開設された地域に入った。発せられる熱気のもと、無秩序に品物が並べられ、財物が交換されている。

荀爽は、複雑な小道をなんども曲がった。

「しまった」

荀彧は、叔父を見失った。

見渡すと、顔や腕に傷のある連中が、聞き取れない方言で罵りあっている。

「取り残された」

荀彧は、叔父の悪意を思い起こした。

わざと危険な場所に置き去りにして、困らせようというのか。荀彧は、半べそをかけた。

「おそい」

壊れかけた建物の壁が剥がれ、叔父が顔を出した。外から見ても分からない構造で、建

物のすきまに通路が作られている。

「待ってください」

荀彧も板をめくった。

叔父は歩調をゆるめず、手をつないでもくれない。荀彧は汗を流し、叔父を追った。

「ここだ」

汚れた布がさがった小屋に着いた。

「ここに親友がいる」

叔父は、呪文のような言葉を唱えると、布をめくった。

なかには、これまでの道程と不釣り合いな、洗練された衣服の男が座っていた。あごが尖り、眼光がするどい。

「今日は、従子を連れてきた」

荀爽が荀彧を紹介した。

「何顛である」

彼は握手をもとめてきた。

それつきり荀彧は放置され、荀爽と何顛の談笑に付き合わされた。

居心地が悪いので、小屋のなかを見回した。地名や人名を記した木簡が、散らばってい

る。

会話の流れから、何顛がここに潜伏していることが知れた。洛陽を往復して、政治の工作をしている。何顛が敵視するのは、叔父とおなじく、宦官たちである。

——私は宦官の婿だ。

荀彧は、暗澹とした気持ちになった。

——いよいよ私は殺される。

もしも潜伏に使うような場所で殺されたら、遺骸は故郷に帰れないだろう。市場で料理に混ぜて売られ、見知らぬ人の腹におさまるのか。

「ところで荀彧は……」

何顛の口から、いきなり自分の名が飛び出した。荀彧は覚悟を決めた。

「どう見えるかね」

荀爽が何顛に問うた。

「王佐の才」

「なんだそれは」

納得できない、という口調で荀爽が遮った。

「王佐の才。王をたすける才覚だ」

「語意を聞いたんじゃない」

じれる荀爽を見て、何顥は破顔した。

「私は志ある者として、おおくの人士と交際がある。荀彧は、王佐の才を持っている。話さなくても、分かるときは分かるものだ」

荀爽は、さらに反論しようとしたが、すぐに黙った。この叔父は、親友・何顥の鑑識眼に、絶対の信頼を置いている。

そのとき、

「王佐だと」

と小屋の外から、声が漏れ聞こえた。戸の代わりの布が、かすかに動いた。

何顥と荀爽は、同時に短剣をなげた。短剣は、布に命中したが、固いものに弾かれたような音をたて、地に落ちた。

「何者だ」

二人の同志は、誰何するのにも、立ち上がるのにも、剣を抜くのにも、まったく同時だった。

荀彧は、身体を壁ぎわに寄せた。

「わはは」

布がずらされた。

「荀爽。友人に短剣を投げるとは」

そこから光が差し込み、逆光が人影を形づくった。すぐに目が慣れて、立ち聞きしていた者の姿が見えた。

「きさまなど知らぬ」

荀爽は、ちよつと間をおいて否定した。

「曹操どの」

荀彧がいった。

確かにそれは、曹操だった。

「幼児のほうが、もの覚えが良いらしい。歳は取りたくないものだ」

曹操は皮肉を述べた。

彼の剣は、さやから少しだけ抜かれている。二人の剣は、ここで弾かれたのであろう。布をへだてて、どうして短剣の位置を予測できたのか、荀彧には分からない。

「お前など知らない」

荀爽は、むきになった。

何顥は眼球だけ動かし、曹操をにらんだ。

「曹操というのか」

「いかにも。橋玄と許劭、そこにいる荀爽の友人。曹操と申します。著名な何顛どのと友人になるため、後をつけてきた」

「後をつけて・・・」

曹操の説明を聞いて、何顛は荀爽をにらんだ。荀爽は顔を赤らめて陳謝した。幼い荀彧を連れているとはいえ、もし政敵に居所を知られたら、何顛は命がない。

「友人だと」

何顛は曹操に顔をむけた。

「そう、友人だ。もし拒否するなら、それも構わない。しかし外には、宦官が雇った兵が控えている。私が指示を出せば、ただちに動く」

荀彧は、必死に耳目を澄まして、そとの気配を探った。兵など、いるのだろうか。

「おもしろい」

何顛は曹操に身体をむけた。

「天下は、曹操のような者でなければ、救済することができないだろう」

ついに何顛は、曹操の才覚を承認した。

「ははは、ははは」

曹操は、開けっぴろげに笑った。宦官の孫である彼は、当世の名士と、関係を結ぶこと

に成功した。目的が成就されたのだ。

このとき荀彧の耳が、異変をとらえた。

「・・・静かに」

荀彧は立ち上がり、曹操のそでを引っ張った。

「外で金属の鳴る音がします。笑い声を聞き、兵が動いたのではありませんか。今すぐ制止してください」

「なんだと」

曹操は、開けた口を閉じそびれた。

「そんなはずはない」

みるみる曹操の顔が青くなった。

宦官の雇った兵とは、曹操の虚言である。虚言であることは、何顛も半ば分かっていた。彼が評価したのは、曹操の機転と度胸、それらを含めた感性の全体であった。

「やはり来る」

大勢の足音が近づいてきた。

曹操は剣を構えた。何顛と荀爽も、いちど納めた剣を、また抜いた。

さて、荀彧や曹操のもとに、何が迫っているのでしょうか。つづきます。

◆袁紹の宝玉 010_131018

何顛の小屋が、足音と気配に包囲された。

「失礼します」

小屋の入口の布がめくられた。

すかさず曹操は、布に剣を突き立て、すばやく引き抜いた。どさっと、外側に向けて人が倒れる音がした。小屋の外が、ざわめいた。

「何顛どの。私たちは——」

別の者が、説明するような口調で名乗りながら、布をめくった。

曹操が、また剣を突き、そして抜いた。

人が倒れた。

「何をなさる。私たちは——」

三人目が、布に手をかけた。三度目も、曹操の剣が往復した。

小屋の外が沈黙した。

がたがたと、鎧の金属を鳴らす重厚な歩みが聞こえ、小屋の前で止まった。

こんどは布が動かない。

曹操は、剣の構えを解かずに、布ごしに外をにらんでいる。

ながい静寂のあと、

「袁紹である。開けてほしい」

と外から聞こえた。

「なんだ、袁紹か」

小屋の主・何顛は、緊張を解いた。彼は剣をおさめ、曹操を押しつけ、布をしぼって外に出た。

「やあ」

と親密そうに会話を始めた。

「なぜこんなに大勢を連れてきた」

「警備のためだ」

「私は潜伏しているのだぞ」

「そうでした、わはは」

何顛と袁紹は、ときどき相手の肩や腕に軽くふれながら、親しげに話している。やがて荀爽も外に出て、会話に加わった。

「荀爽どのに会えて、光栄です」

袁紹は、大きな身振りで感動を表現した。

彼は、連れてきた兵に人垣を築かせたまま、荀爽との出会いを楽しんでいる。

名士との交流は、それ自体が政治的な行為である。何顛や荀爽との会話は、なかば公的なものに違いない。だから袁紹は、兵たちに人脈の構築を見せつけているのだろう。

「騒がしいことだ」

「ええ」

小屋のなかに曹操と荀彧が残り、その会話を聞いていた。

曹操は、懐から小さな布をだし、血のついた剣をぬぐい、さやに納めた。

「きみは袁紹を知っているか」

「ここに来るとき、帰郷する行列を見ました。潁川から汝南に入るとき、着替えていました」

「うわさは本当だったか」

曹操は笑った。

「叔父も、うわさを知っていました」

「袁紹の帰郷。これは、名物の演目なのだ」

「そうだったんですね」

「いや、冗談だ」

曹操は荀彧の頭を後ろから叩いた。

「ちよつと遊んでくるか」

荀彧をおいて、曹操は小屋を出て、

「本初、相変わらずだな」

と、妙に親しげに、袁紹に挨拶した。

「ああ——」

初対面である袁紹は、反応に困った。曹操の小さな身体を、冠から靴まで観察した。胸元に、血のついた布があるのを見つけた。

「何顛どこの新しい護衛か。わが兵を三人も殺すとは、いい腕前だ。心強いな」

袁紹は、曹操の体格が貧相なので、対等の人士として扱う気がないようだ。

「なめるなよ」

そう言うと曹操は、袁紹の不意をついて、

「おや」

とつぶやき、自らの首と耳に手をやった。

「外し忘れているぞ」
と伝達した。

袁紹は顔色を失い、彼自身の首と耳に手をやった。何もないことを確認してから、曹操を咎めた。

「何をはずす必要があるものか」

袁紹はとぼけた。

——清貧でなければ、名声を得られない。

そう考えた袁紹は、何顛と会うときだけ、装飾品をはずす。帰郷するとき、華美な服装を改めるのも同じ理由である。

自兵の見守るなか、恥をかかされた袁紹は、曹操に掴みかかろうとした。曹操は身を交わすと、袁紹の背後に回って、上着をめくった。宝玉が、地面に散らばった。

「きみに贈ろう。拾いなさい」

袁紹は地を指さし、鷹揚にいった。

曹操は拾わない。

間をもてあました袁紹は、

「ところで、まだ名を聞いていなかった」

と言って、手のひらで促した。

「彼は曹操」

曹操が名乗るより先に、何顛が紹介をした。

「曹操は、やがて乱世を救済する者。私はそう思っている」

何顛の仲介で、袁紹と曹操とが握手をさせられた。

「袁紹どのの祖父は袁湯。曹操の祖父は曹騰。どちらも、いまの皇帝を即位させた功臣だ。

孫同士が出会ったのは、めでたい」

袁紹は態度を改め、頭をさげた。

「以後、よろしく頼む」

何顛の演説はつづく。

「実はこの場には、もう一人、偉大な祖父をもつ者がいる」

何顛は、小屋を指さした。

このとき荀彧は、戸の布を垂らし、隙間から会話を覗いていた。袁紹の兵をはじめとして、大勢の視線が集中したので、気まぎくなり、さっと身を隠した。

「神君の孫・荀彧。出てきなさい」

何顛は声をはりあげた。

荀彧は、小屋のなかで震えた。緊張して、腰が抜けてしまった。つづきます。

◆暗殺の計画 011_131019

「神君の孫の登場だ」

何顥が催促しても、荀彧は立てなかった。袁紹の兵がざわついた。焦った荀彧は、いよいよ足腰に力が入らなくなった。

苦し紛れに、這いつくばって腕で進んだ。うっかり、室内に積んであった木簡の山をくずした。

何気なく目をやると、

「弑」

の文字が目についた。

暗号のつもりか、文字を恣意的に散りばめてあるが、皇帝を暗殺する計画に思われた。

——何顥は、決死の徒をつのり、皇帝を弑殺するつもりだ。

彼らなら、やりかねないと思った。

試しに荀彧は、彼らの考えを代弁すべく、

「皇帝は宦官の縁者を重用して、天下の弊害を顧みない。新たな皇帝を頂いて、政治を刷新する」

と口に出してみた。

——いかにも叔父が言いそうなことだ。

そう感じた。

叔父の荀爽らは、体制の改革を叫び、並行して皇帝の暗殺すら企てているのか。

「愚かな皇帝を廃することが、漢家に対する本当の忠義である」

こういう発想の飛躍を叫んでも、おかしくない。

「どうしよう」

いま荀彧がそとに出て、何顥、荀爽、袁紹、の人脈に登録されてしまえば、将来にわたって、行動を規制されるだろう。

荀彧は、兵の前に出るのを辞めた。

「神君の孫はまだか」

兵の歓声に、罵声が混じり始めた。

——じっとしているだけでは、だめだ。逃げねばならない。

荀彧は関与を恐れ、この場を離れようと決意した。

小屋の四方の壁を見渡すと、ほのかに光が漏れている場所があった。這った姿勢だから、気づくことができる微かな光だった。板が薄くなっており、剥がせそうだ。家主の何顛が逃亡するため、用意した抜け道だろう。

いちど逃げると決めると、抵抗なく立つことができた。

荀彧は、板を剥がした。

せまい路地にでた。昼間なのに湿って暗い。荀彧は、そこを必死に走った。

そのころ、

「遅すぎる」

と思った荀爽は、何顛の小屋の戸の布をめくり、小屋をのぞいた。

荀彧がおらず、また木簡が散らばっているのを見て、

「しまった」

と事態を悟った。

袁紹の兵が知れば、何顛の面目がつぶれるだけでなく、混乱をまねくだろう。

荀爽は布を閉じ、つとめて明るい顔で、

「従子の荀彧は、緊張のあまり気絶してしまいました。皆さんのお目にかけるのは、またの機会に」

と弁明した。

何顛は、すどく荀爽と目を合わせ、異常を察した上で、

「神君の孫は、まだ七つだ。仕方あるまい」

と笑った。

荀彧は、足をもつれさせ、とにかく駆けた。

地面には古い什器などが落ちており、たびたび転んだ。

つまずいては起き、また転がり、何度目かに顔をあげると、もとの市場にいた。

「どうなっているんだ」

何顛の小屋にいくとき、叔父の背中を追うだけだった。地理など分からない。

「穎川に帰れば、なんとかなる」

と自分を鼓舞したが、その一方で、

「逃げる必要が、果たしてあったのか」

という反省もあった。

何顛の木簡を崩しても、意味の分からないふりをしておけば、小屋に留まることができた。叔父との旅程を続けることができただろう。ろくな思慮もなく、軽々に逃げてしまっ

た。

「困ったな」

とぼとぼ歩いているうちに、前方から立派な馬に乗った者がきた。

「馬に蹴られたら堪らん」

市場を往来する者たちは、文句を言いながら、騎乗する者に道をゆずる。

馬には黄金の装飾が施してあり、通行する者はじろじろと見た。極彩色に彩った馬鞍の上に、さらに煌びやかな服装の男がいて、市場を見下ろしている。

荀彧も道をよけ、顔を伏せて馬の通過を待った。

「少年よ」

上のほうから声がした。

「きみのことだ。少年」

荀彧が顔を上げると、馬が目の前で停止し、馬上の人が自分を呼んでいる。逆光になり、馬上の人の顔は見えない。肩の装飾品が、ぎらぎらと太陽を反射して、まぶしかった。

「なんですか」

荀彧は、顔をゆがめて答えた。

「監禁され、逃げてきたのではないか」

「なぜ、そんなことを仰いますか」

とぼけようとしたが、馬の大きさに威圧され、正直にしゃべってしまう。

「上品な着物に、垢のない顔。だが、それと不釣り合いなほどに、下半身に血や泥がついている。事件に巻きこまれたか」

——知られた。

荀彧は警戒した。

「おい、怖い顔をしなくても良い。私は、叛逆者を取り締まっている。なにか知らぬか、と思つて声をかけたのだ」

馬がいななき、質問者が下りた。下馬してもなお、長身である。やや面長な男が、優しげに荀彧に微笑んだ。笑顔をつくり慣れていないようだ。滑稽で、ぎこちない。

「何顧という男を捜しているんだ」

荀彧の顔を汗が伝った。

「やはりきみは、なにか知っているようだ」

面長の男は、膝をまげて姿勢をおとし、荀彧をのぞきこんだ。

「わたしは袁術。捜査に協力してほしい」

袁術は、また笑顔をつくった。猿みたいだ、と荀彧は思った。しかし、今はそれどころ

ではない。回答によつては、叔父の荀爽を陥れることになってしまう。いかにして荀彧は、袁術に対処するのでしょうか。つづきます。

◆漢臣の帝王 012_131020

袁術は、荀彧の襟首をつかみ、持ち上げて馬鞍に座らせた。

「きみの名を知りたい」

二人は、視線が同じ高さにならんだ。

「…」

荀彧は警戒して、黙つたままだ。

「きみは、高官を輩出した家柄の子だろう。隠さなくても分かる。血筋が発する風格は、隠せないものなのだ」

「…」

穎川の荀氏と名乗る前から、このように厚遇されるのは初めてだった。荀彧は、袁術を信頼できるような気がした。

袁術からは、

——宦官を討つべし。

とか、

——皇帝は悪政を改めよ。

という類いの、切迫した主張が漏れていない。話していて安らぐ他人と出会うのは、この旅で初めてだった。

「風格というのは、身につけようと思っても身につかない。いや、身につけようと努力した時点から、風格は剥がれ始めるのだ」

袁術は、馬を引き、愉快そうにいった。

「…」

名乗りをこぼんだ荀彧は、黙っているしかなかった。市場をゆっくりと見回ることになった。袁術は気長に付き合うつもりらしい。

袁術は、

「皇帝を補佐したい」

という彼の志を、歴史の前例をひいたり、古典の言辞をひいたりして、荀彧に聞かせた。

「疲れたか」

と気づかい、軽食を与えてくれた。

袁術は、飽きずに市場を巡回する。

「私は荀彧といえます」

心をゆるした荀彧は、ついに名乗った。ほお、と言ってから、袁術は長い顔をなでて、「世代としては、荀淑さまの孫かな」と言った。

「そうです」

やはり祖父の荀淑は、著名のようだ。潁川や汝南あたりの人士で、荀淑を知らぬ者はない。ただし袁術が特異なのは、荀淑の孫と知っても、態度を変えないことだ。

「市場には、さまざまな人間がいるな」

などと、もとの話題の流れに戻されてしまう。

——漢臣の帝王。

そんな言葉が、荀彧の脳裏に浮かんだ。

この若い官僚は、誰よりも皇帝のことを思っている。臣下の模範、という気がした。彼の人格のなかには葛藤がない。

——帝王とは、袁術のような純粋な人物を指すのだろうか。

幼い頭脳は、そう空想した。

世が世なら、袁術は人望をあつめて、建国するかも知れない。だが漢家が根を下ろす現代において、彼は臣下の帝王になるのだ。

「いい眺めです」

荀彧は馬上にあつて、初めて経験する高い視点から、市場を見下ろした。市場には秩序がない。同じ場所を何周もしたのか、つねに新しい場所を歩いているのか、見当がつかない。

「あれは……」

思わず荀彧は、声もれた。

既視感があった。はじめに叔父の荀爽に連れられ、板をめくって入った通路。その入り口に似ている気がした。

「なにか」

袁術は、荀彧の視線をなぞって、その先を凝視している。

「あの建物の壁が、不自然だ」

そう言うや否や、袁術が馬鞍に飛び乗ってきた。荀彧は前方に押しやられた。

「つかまっている」

「……」

袁術が手綱をひいた。馬が突進した。馬のひずめが、薄い板を踏みやぶった。
「捕らえてやる」

袁術が奥歯をかみしめる音が、荀彧の頭上で聞こえた。

「私は――」

何顛の居場所など知らない。

そう荀彧は言いたかった。

いちどは快く会ってくれた何顛を、政敵に売るような真似をしたくない。

「心配するな」

荀彧の頭に、袁術の手が添えられた。

「きみは何も話さなかった。すべては、私が独自に推理したことだ」

はじめ袁術は、何顛という名に反応する、不審な子供を見つけた。だから子供を連れ回し、手がかりを探した。子供の足では、遠くにいけない。丹念に近辺を連れ回せば、情報を得られる。これが袁術の読みだった。

子供、すなわち荀彧の狼狽を見るに、この場所で正解のようだ。

袁術の興奮を感じとり、馬が跳躍した。

「うわっ」

落馬しそうなり、荀彧はしがみついた。

荀彧は考えた。

何顛には、うまく逃げてほしい。叔父の荀爽との鉢合わせも避けたい。だが、袁術の志が成就するのも見たい。矛盾をかかえ、荀彧は泣きそうである。

「兵が群れているな」

馬の速度がゆるめられた。

荀彧にとって、ここにくるのは二度目である。だが景色が変わっていた。何顛の小屋は崩され、その場所には木材が積まれている。

「漢家に仇なす賊を捕らえにきた」

袁術が宣言した。

「どこかで聞いた声だと思えば」

兵の先頭に、袁紹が立った。荀彧は、袁紹に顔を見られないように、馬に首に隠れた。

「くそっ、庶兄か」

袁術が舌打ちした。

「愚弟よ。ようこそ、わが宿营地へ」

袁紹が余裕たっぷりに、ふんぞり返った。

「もうここに何顛は居ないだろう」

袁術は落胆した。だが荀彧は、ひそかに安堵した。何顛がいなければ、叔父もまた移動した後だろう。矛盾と板挟みから解放された。

がきん、

と、すぐ後ろで音がした。

荀彧は振り返った。

袁術が、手の甲につけた防具で、矢をはじいた音のようだ。

何顛の去った地で対峙する、袁氏の兄弟。袁術の馬鞍に乘せられた荀彧は、どうなるのでしょうか。つづきます。

◆ 絹布の拘束 013_131022

袁術の馬は、騎乗する者の怒気を感じとり、全身から熱気を噴きあげた。

「庶兄よ。官職にも就かず、こんなところで暇つぶしか」

袁術は兄に指を突きつけた。荀彧は身体をかがめ、隠れたままである。

「見境なく官歴を重ねるお前こそ、時間が余っているのではないか」

袁紹が腕をあげ、天を突いた。

「...」

不自然な沈黙のあと、袁術が悲しそうに、

「叔父が心配している」

と、首を小さく振った。

彼らの叔父とは、袁隗という人物である。兄（袁術の父）を差しおき、高い官職を早くから経験していた。

——数年のうちに三公に昇る。

という評判が聞こえる。

「叔父は、私の志を分かってくれる」

「血迷ったことを」

兄の弁明を、袁術が笑い飛ばした。

「よく聞け」

と前置きして、袁術は、

「叔父は私たちに、漢臣としての経験を積むことを望んでいる。袁氏は、漢家に対して功績を積むことで、ますます大きくなる——」

などと演説しながら、彼自身の衣服を細くちぎり、荀彧を後ろ手に縛り始めた。「いたっ」

荀彧は、危害を加えられると思い、身を固くした。だが、ちぎられた衣服が上質の絹布であることと、手加減が絶妙なことにより、荀彧に痛みはなかった。

「三公の家の子である我らは——」

袁術は黙らない。

むしろ、細かく器用に動く手とは裏腹に、発言は壮大になる。

「そんな料簡だから、いつまで経っても」

「いやいや、それは違うぞ」

兄弟は、激しい応酬を続けた。

——どうなる。

幼い荀彧は怯えるばかりだ。

これまで袁術は、優しくかった。だが兄の袁紹と会った瞬間から、まるで別人のように感情を乱し、気が狂ったように見える。

——袁術の本性は、こちらか。

荀彧は落胆した。

きゅつと、腕が締められた。やっぱり痛い。

「庶兄は、袁氏の人間ではない」

いよいよ袁術は、激烈に兄を否定した。

「お前こそ」

袁紹らの関心は、袁術の言葉に向く。一人として、手許など見ない。その間にも袁術の手は、せつせと荀彧を拘束した。

袁術が、ぼん、と荀彧の腕を叩いた。

「決裂だな」

「どうせ分かり合えぬよ」

二人の袁氏は、ほぼ同時に会話を打ち切った。この時機を待っていたかのように、袁術は、

「貴人の子を捕らえ、反逆者の居所を聞き出そうとした。だが、無駄になった」と言って、荀彧のえりを持ち上げた。

「えっ」

荀彧の顔は、馬の首の影からはみ出し、袁紹の視界に入った。

「あ、神君の——」

袁紹の顔が、たちまち白くなった。

「姿が消えたと思ったら、さらわれていたとは。人質を取るとは、つくづく卑怯な弟だ」
激昂した袁紹は、こまかな事実の前後関係など検討しない。袁術が荀彧を誘拐したと、すんなり納得した。

——いかにも弟がやりそうなことだ。
と確信すらした。

「これも漢家のため」と、袁術が開き直った。

「ほざくな」

「私は反逆者を捜している。反逆者を捕縛できそうなら、子供の五人や十人、締め上げる。
これが私の忠誠なのだ」

袁術は、乱暴に荀彧を揺すった。

「返せ」

「もう用済みだしな」

「渡せ、と言っている」

袁紹は緊張を高めた。

神君・荀淑の孫。同士である荀爽の従子。許劭が至忠といい、何顛が王佐と評価した幼

童。いま「愚弟」袁術によって、荀彧を殺させては、袁紹の名望が損なわれる。

「兄が一人で、取りにこい」

袁術は、鞘に入ったままの剣を腰から抜き、袁紹に向けた。

これを合図にしたのか、暗い路地のほうから、足音が鳴った。荀彧は、窮屈な姿勢のまま、辛うじて首だけを後ろに向けた。

「兵だ」

袁術の党与のようだ。袁紹が従えているのと同数、約五十人はいそいだ。

「気づかなかった」

荀彧は驚嘆した。

袁術は市場において、一人で探索をしている様子だった。だが、少し離れたところに兵を置いていたのだ。

考えてみれば、袁術のように権勢のある者が、単独で動くのは不自然である。

「取りにこい」

袁術は兄に逼った。

「むごいことをする」

ゆっくりと下馬して、袁紹が前方に歩んだ。

袁紹の兵は、これまで構えていた矢を下ろさざるを得ない。形勢は逆転し、逆に袁術の兵が、袁紹に狙いを定めている。

袁紹が、袁術の馬の真下に来た。

「さあ帰ろう、神君の——」
馬上に手をのばした。

荀彧は、袁紹の腕をつたって、袁術の馬から下りた。

久しぶりに地に足がつき、

「ありがとうございます」

と荀彧は頭をさげた。

後ろ手を縛られているので、思うように歩けない。袁紹は、彼自身のかげに荀彧を隠して、保護した。

袁術の演出によって、荀彧は、

——何顛と荀爽を政敵に売った者の汚名を避けられた。

——見境のない逃亡、

という失敗も、打ち消された。

そんなことなど知らない袁紹は、

「まことに、ひどい弟だ」

ぶつぶつ言いながら荀彧を逃がし、しかし振り向きざまに、

「思い知れ」

と甲高く怒鳴って、袁術の馬の顔面を、渾身の力で殴った。

馬は微動だにせず、却って袁紹が姿勢をくずした。

袁術の兵たちは、腹をかかえて笑った。

「ふん」

袁紹は小走りで自分の兵のほうに戻った。

「保護して差しあげよ」

人質だった幼子は、袁紹の兵の管理下に入った。兵たちは、はるか後方にある茂みのなかに荀彧を置いた。

「じつとしていなさい」

そう命じ、兵たちは持ち場にもどった。

袁紹が自分の馬にまたがった。力んで、

「ついに一戦、交えねばなるまい」

と言った。

「どちらでも良いが」

袁術は腕組をして、側近たちと笑いの余韻を楽しんでいる。

荀彧は木々のあいだから、一触即発の事態を見た。さつきまで、あの場の中心にいたかと思うと、今更ながらに恐ろしくなった。

後ろから、

「この裏切り者め」

と声をかけられた。

曹操だった。

「違います。私は……」

釈明を試みたが、口を塞がれた。

「分かっている。全て見ていた」

——曹操にも尾行されていた。

何も知らないのは自分だけ。そう思い、荀彧はうなだれた。もし成長しても、袁術や曹操のような政争をやれるとは思えない。

「そんなことより」

曹操が話題を変え、賭けよう、と持ちかけた。

「賭けとは」

「袁紹と袁術。どっちが勝つか」

「不謹慎ではありませんか」

「だったら、きみの裏切りを暴露する」

「う……」

後ろめたいことを、荀彧はしていない。

だが、第三者から見れば、曹操の解釈のとおり、裏切りに等しいだろう。せつかくの袁術の好意を、踏みにじりたくないと思った。

「受けましょう、その賭けを」

「きみから選んでいいぞ」

荀彧と曹操は、戦いの行方をどのように予測するのでしょうか。つづきます。

「袁紹と袁術、どちらが勝つか」

こう曹操に問われ、荀彧は答えた。

「袁氏の兄弟は、戦うべきではありません」

「そんなことは聞いていない」

「はい。戦うべきではありませんが——」

「早く決めろ。始まってしまおうぞ」

曹操が急かした。

二人の見る前で、袁紹の兵が声をあげた。遠くに位置どる袁術は、静寂をたもっている。

「私は袁術にします」

あわてて荀彧は言った。

じつは初めから答えを決めていた。だが、すぐに答えると、曹操に思いを見透かされそうな気がした。だから荀彧は、迷うふりをしていた。

「ならば俺は袁紹に賭けよう」

曹操が唇をなめた。

ひとすじの風が吹き抜けたあと、

「射ろ」

袁紹の声がひびいた。矢が天にあがった。

「ここでは見にくい。あちらに回ろう」

曹操は荀彧を連れ、茂みのなかを遠回りして、袁氏の両者が見渡せる位置につけた。

「見てみる、袁術は防戦するだけだ」

曹操が指さした。

——がんばってください。

荀彧は祈る思いで戦場を見た。

袁術とその兵は、楯を頭上にかざして、じっと動かない。

ひとしきり矢を使い切ったのか、袁紹の矢が止んだ。

「ねえ」

袁術が穏やかに命じた。

「うて」

兵が一斉に射た。矢は天を舞うことなく、水平に飛び、一直線に袁紹に集中した。

どさっ、

と音を立てて、馬ごと袁紹が倒れた。

「大将がやられた」

悲鳴があがった。慌てて駆け寄る者がいれば、この場から逃げようとする者、意味のない怒号をあげる者もいた。

しかし、少し間をおいてから、

「やるではないか」

と、馬の下から袁紹が這いでた。

「いい矢だった」

袁紹は強がって、ひざの土をはらった。

離れて戦局を見ている荀彧は、何が起こったのか分からず、目を細めた。袁紹には、一本の矢を刺さっていない。代わりに袁紹の馬に、無数の矢が立っている。

相変わらず堂々としているが、もう袁紹から戦意は感じられない。

「袁術の——私の勝ちです」

荀彧は嬉しがって、曹操の横顔を見た。

「まだだ」

凄まじい形相で、曹操はふところに手を入れた。小さな黒塗りの物体が出てきた。

「それは——」

何ですかと、荀彧が問う間もなく、彼はそれを構え、何かを発射した。次の瞬間、遠く

で袁術が馬ごと倒れた。

「いったい何を」

荀彧は曹操の手のなかの道具を凝視した。

「祖父にもらったものだ」

彼の祖父とは、宦官の曹騰である。

「これで賭けは引き分けだな」

曹操は道具をしまい、笑顔を見せた。

荀彧の目に涙がにじんだ。

「あなたは、そんなことのために、たかが賭けの勝敗のために、袁術さまを殺したのですか」

幼子は、曹操につかみかかった。突き返され、草の上に尻から落ちた。

「まあ見てみる」

曹操が指さす先を見ると、袁術が馬の下から這い出た。

「倒したのは馬だ。まさに引き分けだろう」

快活に曹操が笑った。

荀彧は、腕で涙をぬぐって、

「あなたは、袁術よりも袁紹のほうが優れていると思いますかと聞いた。

意味のない賭けごとよりも、こういう意見の交換こそ、曹操とやりたかった。質問する自分の声を聞いて、荀彧は本心に気づいた。

「そう思う」

真顔で曹操は答えた。

「袁術の兵は、よく錬磨されている。それは袁術が、真面目に官職に就いているからだ。いっぽうで袁紹は議論に明け暮れて、地に足が付いていない。だが俺たちの世代には、そういう者が求められる。兵など、他人が錬磨した者を奪えば、どうにでも間に合わせられる」

「ええ——」

としか、荀彧は言えなかった。

さつき市場で袁術と会話して、多くのことを感じた。感じたはずだが、曹操にうまく説明できる気がしない。いや、まだ説明するには自分が幼すぎるのであって、もっと成長したら、うまく言えるようになるだろう。

——漢臣の帝王。

という言葉を感じたとき、心のなかは、どのようであったか。何に感動したのか。

この名状しがたい思いを、きっと曹操に理解させたい。いつの日にか、聞いてもらおう。荀彧は決意をかためた。

「おや、兄弟も終わりのようだ」

と冷やかすばかりで、曹操はこの場で、荀彧に意見を求めなかった。

袁術は配下から馬を譲られ、それに跨がると、もとの道を帰っていった。

曹操は荀彧をひっぱり、

「大した戦さだったな」

と言いながら、袁紹に近づいた。

「からかうな」

馬を失った袁紹は、機嫌が悪い。

本人は努めて平然と振るまっているであろう。しかし荀彧は、袁紹の口が醜く歪んで、もとに戻らないのに気づいた。乗馬に多くの矢を突き立てられ、恐くないはずがない。

——彼もまた英雄なのだ。

と荀彧は認識を改めた。

「愚弟の馬を倒したのは、きみか」
「さあな」

曹操は袁紹を相手にしない。

挨拶もほどほどに、「まだ死ぬんじゃないぞ」と言って、宦官の孫は立ち去った。最後の言葉は、誰に向けられたものなのか、この場にいる者は、揃って首をかしげた。

ひざをつき、袁紹が荀彧の目線にあわせた。

「神君の——には、愚弟が無礼を働いて、申し訳なかった。責任をもって、きみを荀爽どのに届けよう」

「すみません」

きまり悪そうに荀彧が頭を下げた。

「私から責任をもって、事情を伝えよう」

また袁紹は、責任、と言った。

「すみません」

叔父の荀爽は、袁紹ほど単純ではない。いや、寛容ではない、と言うべきか。荀彧は、叔父のもとに戻るのが心配だった。

「何願と荀爽の両名は、べつの場所に滞在して頂いている。案内しよう」

袁紹は新しい馬をひき、荀彧を自分の前に座らせた。

——袁紹が話を通してくれる。大丈夫だ。

荀彧はそう願った。

袁紹の手綱さばきは、着実で安定していた。袁紹の手綱さばきは、粗雑だが勇躍させられるものだった。

もしも再び、袁紹か袁術か、という二択を迫られたら、自分はどうか答えるだろうか。荀彧はそんなことを考えながら、袁紹の馬に揺られた。

——それよりも。

まずは叔父である。

荀爽は、勝手に逃亡した荀彧と、どのように再会するのでしょうか。つづきます。

◆水難と火難 015_131026

袁紹に同乗して、汝南の城門をでた。

しばらく馬が駆け、丘陵に昇った。

「ここに荀爽どのがいる」

坂を削ってつくった穴倉の前で、袁紹は馬を木に結んだ。

「袁紹です」

名乗ると、何顛が顔を出した。

「荀彧は見つかったか」

「はい」

応答を聞いて、荀爽も出てきた。従子の姿を見とめ、こら、と叱り飛ばしてから、

「どこに逃げていた」

と詰問した。

「それは：：」

荀彧は、すぎるように袁紹を見上げた。袁紹は、二人の荀氏を交互に見るだけである。

叔父が、荀彧に近づいた。

じつと目を見つめ、沈黙の意味を探ってから、拳を振るった。小さな身体は、宙に浮き上がった。荀彧のほおの下で、草がつぶれた臭いがした。

「いかなる意図で姿をくらました」

荀爽は、さらに殴ろうとした。

——しばし、

とあって、袁紹が割り入った。

「しばしお待ちください。わが弟・袁術の愚行をお許してください」

袁紹が膝をついて、荀爽にわび始めた。

荀彧が失踪した経緯を、彼なりの理解に基づき必死に説明してくれた。「袁術」の名を出すたびに、怒るやら恥じるやらで、舌がうまく回らなくなった。收拾がつかなくなった。

荀爽が、袁紹を助け起こした。

「荀彧は何顛の小屋のなかにいて、姿を消したのです。市場で袁術どのに誘拐されたにしても、そのあいだの説明がつかない」

「それは——」

また袁紹が膝をつき、草のあいだに冠をうずめ、事情をべらべらと喋った。

荀彧は、生きた心地がしない。

袁紹は全ての事実を把握していないはずだ。何を言っても、辻褃が合わなくなるのは当然だった。

——真意はどこにあるか。

荀彧は不思議に思った。

袁紹は馬鹿ではないだろう。袁術の関与だけでは、全ての説明がつかないと把握してい

るはずだ。それでもなお、この場を収めようとしてくれている。

「まったく全ては弟の袁術のしわざで」

声を裏返して詫びた。

——弟に対する憎悪だけは、真実に裏打ちされている。

荀彧が感じ取れるのは、そこまでだった。

「わかりました」

荀爽も地に膝をつけた。

「袁紹どのに免じて、従子は不問とします。送り届けて下さって、ありがとうございます
た」

袁紹が顔をあげると、涙が流れていた。

——よく分からない人だが、

荀彧は、荀爽と抱き合うようにして立ち上がる名門の男を、じっと見つめた。自分を救
ってくれたのに、なんだか気味がわるい。

——この度量は、帝王の一種に違いない。

そう納得することにした。

袁紹は何顧に、新しい住居を提案した。また政治工作につき、いくつか意見を交換した

ようだ。再会を約して、袁紹は立ち去った。

「私たちも潁川に帰る」

叔父が別れをいった。

二人の荀氏は、太陽で方角を確かめて歩き出した。

「最後に一つ」

何顧がひきとめた。

きつと政治の話だと思い、荀彧は歩みを止めない。近くで聴かれることを、きつと叔父
は嫌うだろうと思ったからだ。

「荀彧についてなのだが」

自分の名が出て、立ち止まった。

「この子は、火によって難を受ける。気をつけなさいと。これを言おうとした」

「こんどは火難か」

へらへらと、荀爽は笑った。

「なにかおかしなことを言ったかな」

何顧が怪しんだ。

「いや、こつちのことだ。以前も同じような話を聞いたのでな」

汝南で一泊してから、故郷にむかう。

雨が降り出した。

道を急ぎながら、叔父がいった。

「天命を安易に論じるべきでないように、人の運命もまた、予測できない」
「ええ」

この叔父は、逃げた自分を許してくれたのだろうか。荀彧は、なお不安だった。もともと親密な関係ではないが、何顛と別れてから、さらに口数が少なくなった。

「初めに会った許劭は、お前を至忠といった。次に会った何顛は、お前を王佐といった」
雨脚が強まった。

颍川は遠くない。途中に大きな街が少ないから、叔父は突っ切るつもりらしい。

「許劭はお前を水難といい、何顛は火難といった」

「そうでした」

——この旅は何だったか。

荀彧は考えた。

叔父は、自分を見極めるために、鑑識眼のある人物と会わせた。両者の発言は矛盾した。

どちらかが評論を誤ったのか。もしくは、両者とも信じるべきでないのか。

「王佐と言えば、張良」

叔父は、漢家の建国に携わった功臣の名を出した。もちろん荀彧も、名を知っている。

「何顛を信じるなら、お前は王者の事業をたすけることになる。だが——」

沈黙が訪れた。

この中断の意味に、荀彧は感じている。だが、黙って聞くことにした。天が与えた運命を、ここで言い渡されるような気がした。口をはさむべきではない。

「漢家はすでに存在している。天子は、二十余世にわたって継承されてきた。今さら王佐は必要とされない。漢家に至忠でありながら、王佐でもある。おかしい話だ。だから——」

小川に掛かった橋に踏み入れた。

雨のため、眼下では水量が増している。橋の板は濡れて、滑りやすい。

叔父が短刀を出した。

「天下において吉凶の定かならぬお前を、帰郷の前に殺しておこうと思う」

荀彧は上着を捕まれた。

せまい橋の上である。逃げ場がない。

「叔父上……」

荀彧は怯えて、目を見開いた。大粒の雨が、勢いよく注いだ。叔父が冗談を言っているのではないと分かり、今度は目を閉じた。

「いま荀氏に必要なのは、至忠とも王佐とも計りがたい、不世出の人材ではない。同志である」

短刀が水平に振られた。

空を切った。

荀爽は戦闘を修得していない。荀彧があばれたせいで、距離が及ばなかった。

「荀彧。お前は、わが親友の何顛を裏切った。子供だから思慮が浅い。そう考えて、許そうとも思った。袁紹の顔も、立てねばならぬ。だが子供だからこそ、本性が現れる。だから――」

「助けて」

雨を含んだ荀彧の上着が、叔父の手をすり抜けた。

荀彧は慌てて走った。橋の上で転んだ。叔父に袖を踏まれた。

「旅先での客死。不自然ではない」

短い剣では、地に伏せた荀彧に届かない。荀爽は姿勢を変えた。重心が移動したはずみに、荀彧は逃れることができた。

うわあ、と泣いて、川に飛びこんだ。

「水難とは、これか」

と思った瞬間、鼻からも口からも水が入り込み、荀彧は流された。つづきます。

◆至忠と王佐 016_131027

荀彧は濁流に運ばれた。

流れが曲がるところで、打ち上げられた。大きな川でなかったから、荀彧が溺れていた時間は長くない。

「しっかりしろ」

背中を叩かれて、目を覚ました。

「あっ」

たちまち荀彧の体内に、死の恐怖が再開された。身体を起こそうとして、激しく咳き込んだ。泥水を吐いた。左右を見回したが、叔父の荀爽の姿はない。

景色が暗い。まだ雨は降り続けている。

起こしてくれた者の姿を、荀彧は舐めるように見た。警戒心が強くなっており、外見の

吟味が執拗になった。

「長社の鍾繇です」

彼は苦笑して答えた。長社とは、潁川郡のなかの県である。

「ここは潁川ですか」

鍾会の名乗りにも郡名がなかったもので、とっさに聞いた。

「そうだ。きみは、どこから流されてきた」

背中を撫でて、憐れんでくれた。

流されることで、郡境を越えたのか。叔父と話しているうちに郡境を越えたのか。とにかく、故郷に帰ってきたという安心から、声をあげて泣いた。

「きみの家はどこだ」

「潁陰です。潁陰の荀彧です」

相手にならない、県名で出身をいった。

これは奇遇だ、と鍾繇が興奮した。

「きみは、神君・荀淑さまの家系か」

「祖父です」

「私の曾祖父は鍾皓というのだが――」

「聞いたことがあります」

「曾祖父は、荀淑さまと交流があったという」

「それも聞いたことがあります」

二人は、にわかに打ち解けた。

「また川に落ちたらいけない。私在家まで送ってやろう。私は父の使者を果たした帰りだな」

「お願いします」

神君・荀淑の権威は、何颯のように、名声を政争の道具とする者たちに食い散らかれた。

荀彧は、祖父の名を疎ましく思っていた。だが今回のように、友人が増える契機となるなら、素晴らしいことだ。

「初めて会ったような気がしません」

荀彧は鍾繇になついた。

雨が強くなった。

「ちよっと休んでいくか」

鍾繇が指さす先に、古びた建物が見えた。

「ごめんください」

声をかけたが、返事がない。鍾繇が覗きこむと、誰もいない。「失礼します」

まばらに家材が残っているが、寂れており、人の住んでいる気配がない。鍾繇に手招きされ、荀彧は調理場に入った。

「幸運だ。薪が残っている。乾いているから、火がつくだろう」
荀彧はくしゃみをした。

「きみは溺れたのだ。暖まってゆかねば、風邪をひいてしまう」
火に点つけた。鍾繇が昔話をした。

「私が荀彧くらいの子供ころ――」

鍾繇いわく、鍾氏は名望こそ高いが、清貧な家柄である。全ての男子に、完全な教育を施すほどの余裕がない。鍾繇は、兄弟のなかに埋もれたくないと考えた。あるとき父と外出した。道で、人相を見る者に会った。

「この子は貴相であるが、水難の兆しがある」
と言われた。

鍾繇の父は、本気にしなかった。しばらく行くと、橋があった。鍾繇の馬が驚いて、橋から川に落ちた。鍾繇は死にかけた。

父は鍾繇を救いあげると、

「人相見は、本当のことを言った」

といい、鍾繇に財産をつぎこみ、学問をさせてくれた。兄弟のなかでも、抜きんでた学識を得ることができたと。

こういう話だった。

「人物評論は、人の生を動かす」

彼は上品な表情をくずした。

「じつは私もなんです。許劭という人に、水難と言われまして」

荀彧も自分の話をした。

「つまりきみは、至忠の漢臣になるのだな」

鍾繇は身を乗り出した。

「めでたい。良かったじゃないか」

などと話しながら、耳を澄ました。

「雨、やみませんね」

荀彧が外の様子を見てきた。

「少し眠ろうか」

地面にむしろを布き、二人とも仮眠を取ることにした。鍾繇も、遠方からの帰路を雨に降られ、疲れていたのだ。

荀彧は、熱さと苦しきで目を覚ました。

「あち——」

上着に火が燃え移っている。

荀彧は、慌てて上着を脱ぎ捨てた。

「だいじょうぶか」

鍾繇は、彼の衣服をぬいで、荀彧をばんばんと叩いた。荀彧の上着は、部屋の隅で灰になっってしまったが、かるい火傷ですんだ。

「雨は強まる一方だ。夜が明けてから出発しよう。私の上着をあげよう。もう一度寝なさい」

札を言って横になったが、今度は寝つけない。荀彧が薄目を開けると、火が燃え移らないように、鍾繇が見てくれている。

——あの、

と荀彧は切りだした。

「水難だけじゃなく、火難もなんです」

「なんだ。火の予言もあったのか」

荀彧は何顧の話をした。

「至忠の漢臣でありながら、かつ王佐の才も持ち合わせている。どういう意味だろうか」

鍾繇はあごに手をあてて考え込み、

「おもしろい。きみがその天命のもと、どのような官歴を歩むのか。ぜひ私も見届けたい」と言ってくれた。

鍾繇は荀彧を座らせ、向きあった。

「私は水難のおかげで、学識と人脈を築いた。これを原資として、いずれかの官職を手に入れたら、その上官にきみのことを推薦してみよう。そのためにも、勉学に励んでおくように」

「ありがとうございます」

そのあとも何か喋っていたはずだが、荀彧は寝てしまった。

目を覚ますと、颯川の空はすっかり晴れていた。

十三年が経った。

二十歳となった荀彧に、友が訪ねてきた。

「鍾繇だ。約束どおり、迎えにきた。潁川太守の陰脩さまが、きみを招きたいと仰っている」

荀彧はうなずいた。

ときに中和五年。荀彧にどのような官歴が待っているのでしょうか。つづきます。